# 霊鬼

村野守美

今は昔

なんだか
いやな
夜だな
兄者…

おまえは
仕事を
しようと
すると
すぐに
愚痴る

悪い
癖だぞ
弟よ……

ホントに
今夜は
気が重いん
だよ
兄者
ゥゥーー
へんな
風が
吹いてるし
ヒュゥゥウーー

こんな夜は
鹿なんか
取りたく
ないよ…

それに
待ち狩りは
あんまり
好きじゃあ
ないんだよ

文句が多いぞ

くん
くん
よーし
この木には
鹿の奴
体を
こすりつけた
臭がする

鹿を
狩るには
こうやって

木の枝に
横木を
縛りつけて

鹿が下を通りかかるのを
じーっと待つこのやり方が一番いいんだ

ざざ～あ
もう
だいぶ
刻もたつのに
うさぎ一匹
通りゃしないよ
兄者……
それでも
じーっと
待つんだ
…………
こうやって
いると
家にいる
母者が
心配だな
兄者……
ウム
あまりに
静か過ぎると
普段
気にかかる
ことが
想いかえして
しまうものだ
もう
母者も
だいぶ
年をとって
しまった…
今では
子供の私の
顔さえ
時々忘れて
しまうらしい……
哀しいことだ…

これ
弟よ
眠るでないぞ

鹿がこの下を通りかかって
この私が討損じたら二の矢でお前が射とめるのだからな……

ウム
眠らん
眠らんよ
ただしばしの間目をとじてもかまわんだろ…兄者…

グゥ

ざざあ‥

これ…弟よ…
ムニャムニャ

今ほどへんな気配がしなかったか……?

ン……
兄者
いよいよ
鹿の奴
来たと
言うてか

い
いや
鹿では
ない
鹿の気配
などでは
ない

暗くて
そっちが
よく見え
ない

なんとも
言いようが
ない
気配じゃ
ゴオオオォ
しかも
私のこの
木の上の方
だよ

おそらく
夜鷹か
何かだろう
兄者…

ムニャ
ムニャ

ざっ

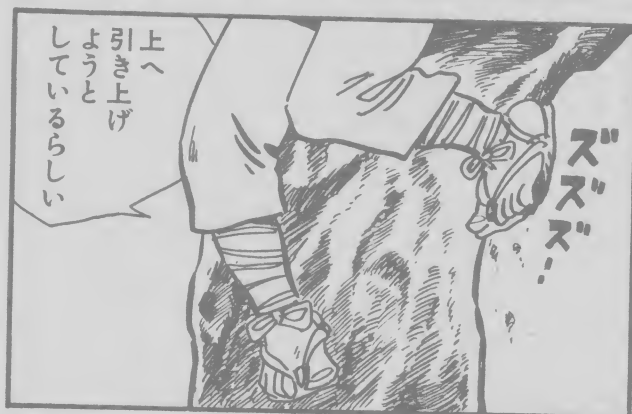
ガ

ウ

ざわ
ざわ
ざわ
し
鹿ではない
鹿が木の上におるものか

その上
私の髻をものすごい力でつかんでおるのだよ
首ごとひきちぎられそうじゃ

上へ引き上げようとしているらしい
ズズズ…

大声を出してくれ兄者
この暗闇でも音をたよりに見当をつけて兄者の頭の上の奴を射止めてくれる……

わかった………
ところで弟よ

なんと大声出したものかな……
あまりにとっさのことでなんと言ったらよいのか考えがうかばない……
なんとでもわめけっ兄者

わかった……
そしりをとどむるはぁ

みをおさむるにしくはなしいい……

よーし……

アアアア
ああ
ばち

ギャギー

さッああ
さッあ
ざざざあぁ。

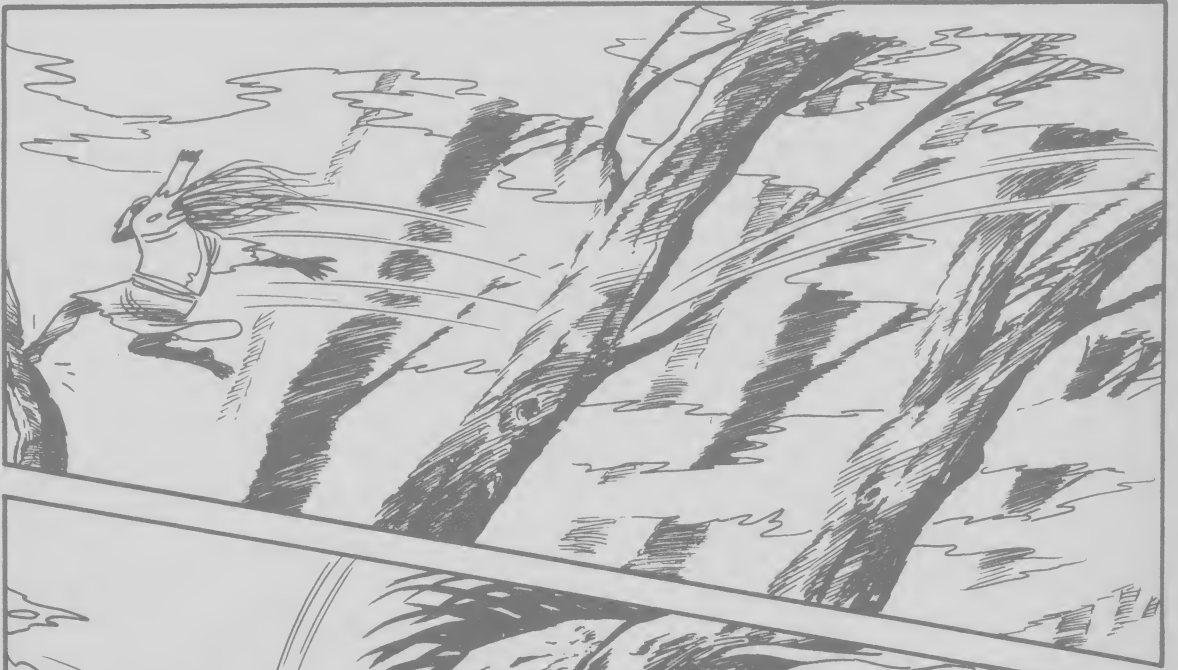
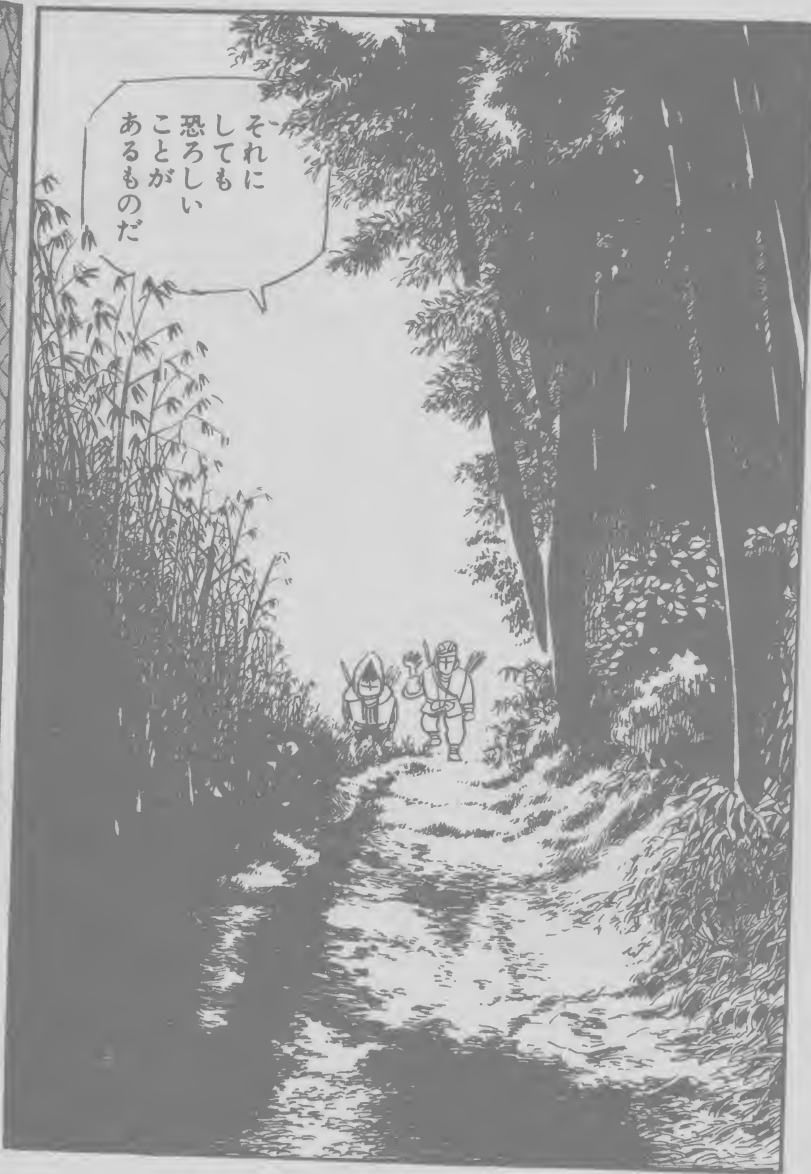
ヒュウウウ

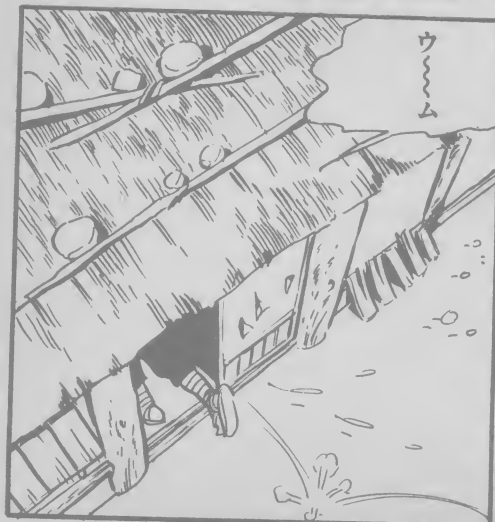
ど
どうやら
頭の上の奴は
逃げてしまった
ようだ
弟よ…

それに
しても
何者だろう

まるで
風に乗って
いって
しまった
ヒューーー

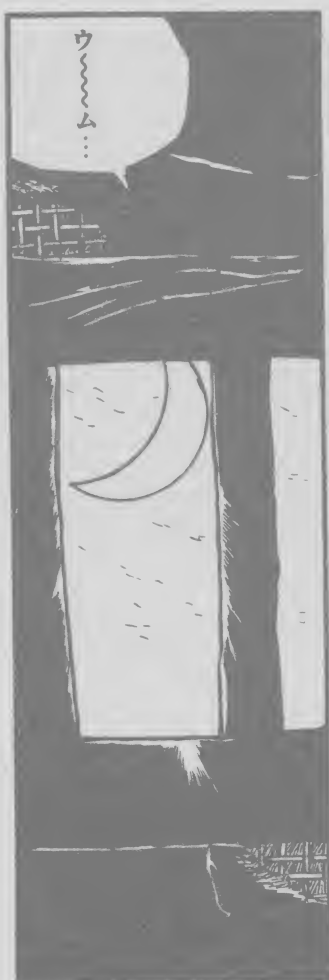
命を
ひろったぞ
弟よ…
ありがたい
兄者
その頭に
のせている
ものは
何んだ

うむ…
どうやら
さきほどの
雁股の矢で
射斬ったらしい
骨太い
手だな…
明るい
ところで
見たい
ものだ

今夜は
帰った方が
いい
うむ
なにより
それが
いい……

それにしても恐ろしいことがあるものだ

おーい母者今帰ったぞい

ウ〜〜〜ウ〜〜〜ムム……
どどうした母者

ウ〜〜〜ム

なんでうめいておられる…!?

ウ〜〜〜ム…

どこぞ痛むところでもあるのか…!!
ウームムン
なにも言わんではさっぱりわからんどこが痛むのか言って下され…

ウ〜〜〜
ウ〜〜〜

弟よ
哀しい事に
母者は
もう私らを
自分の息子か
どうかも
わからんのだ
声をかければ
かけるほどに
おびえて
おる……
ウム…

パ
パ
チ
チ

どうやら
眠って
しまった
らしい…
ところで
兄者
さっきの
あの化物の
手を
よーく
見せて
くれ……

ウーム
見るほどに
鬼のような
手だ…
ウム
まさに
あれは
鬼だろう
ボキッ

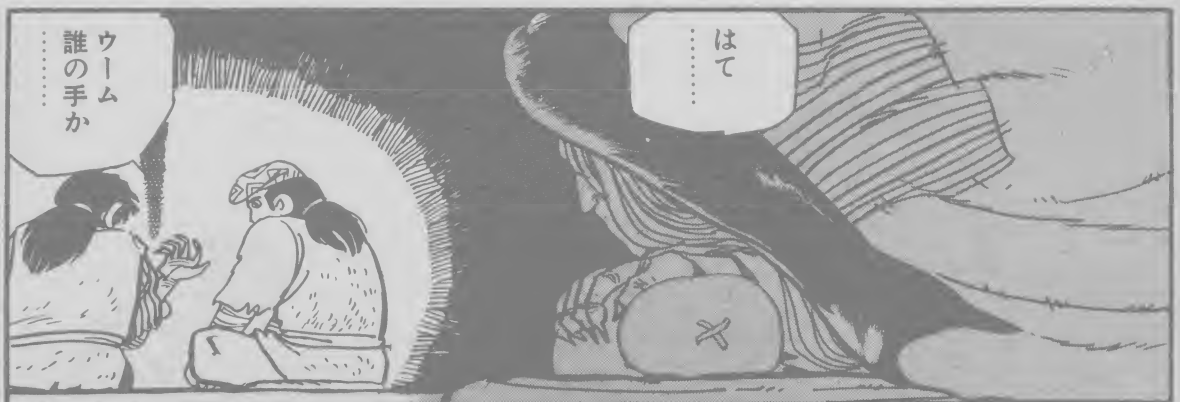
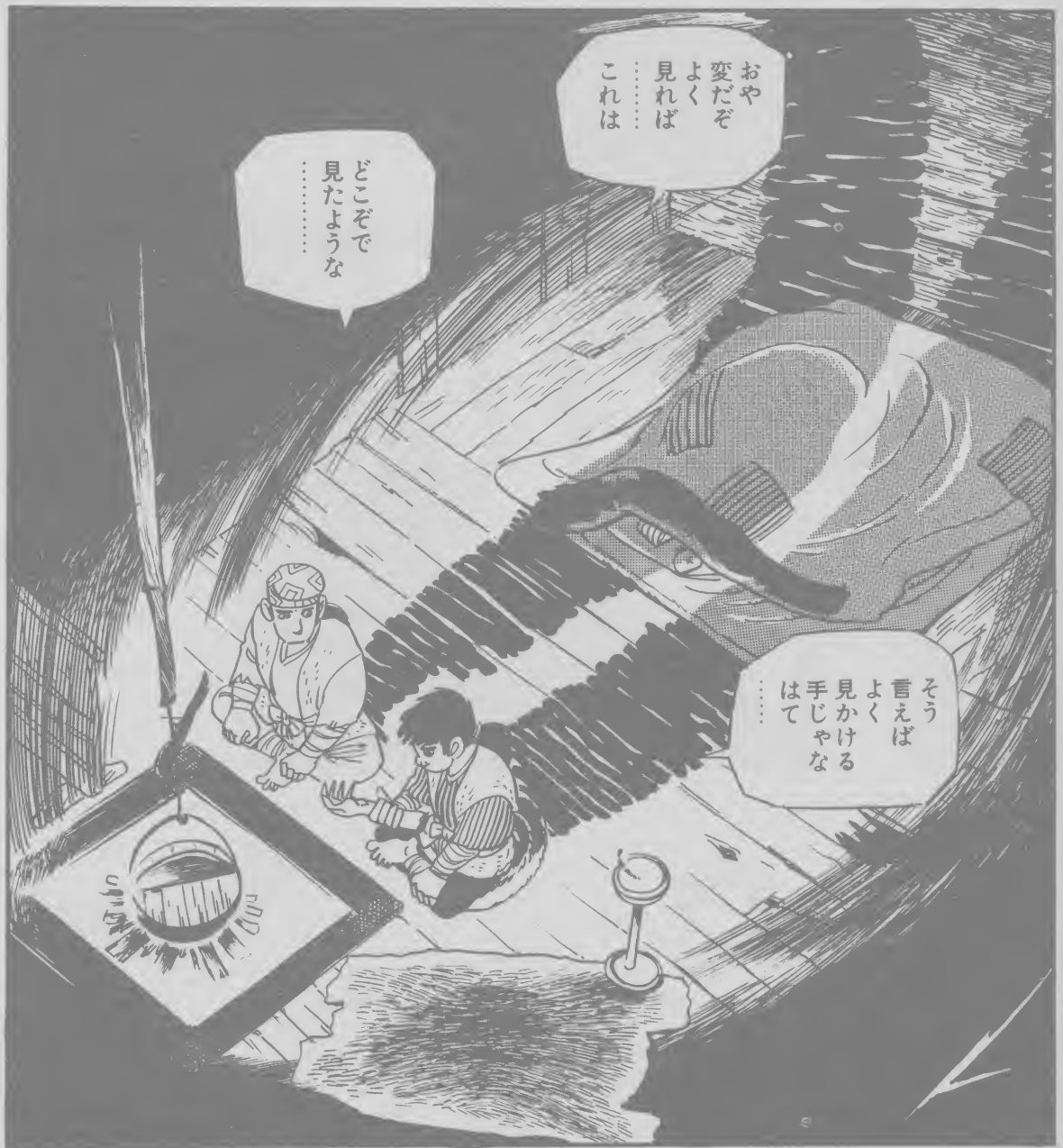
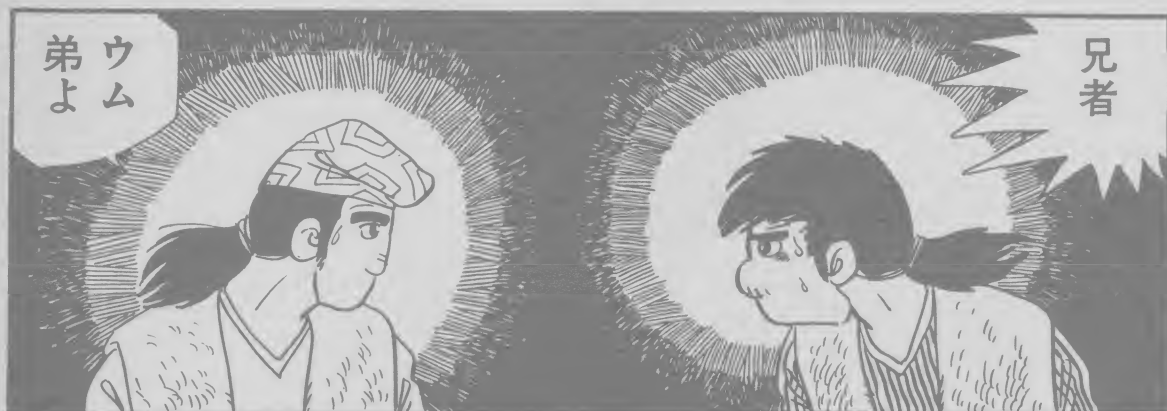
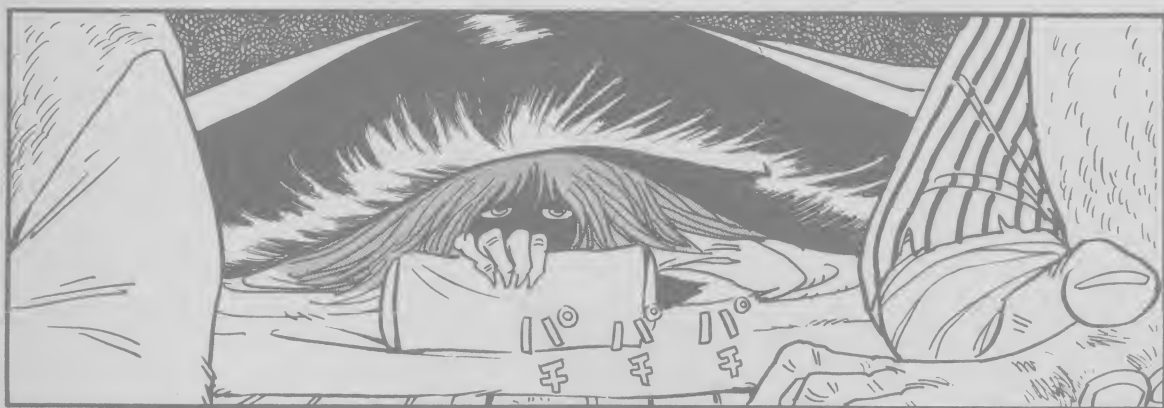
私を
ひっつか
まえて
食おうと
してたのだよ

おや変だぞ よく見れば……これは

どこぞで見たような……

そう言えばよく見かける手じゃな はて……

……
……
パチ
パチ
パチ
兄者
ウム
弟よ
こ
これは

うぎゃ
ガバァー

こおらあ
母者
ま
まさか
おまえさまの
手だったとは…
母者
どうして
どうして
息子の私を
食おうと
した……

母者

追うな
無駄な
ことだ……
弟よ…

母者は
鬼に
なって
しもうたに
違いない

よく
あることだと
聞いたことが
ある
時として
年老いた
母は
鬼になるとな…

そして我子でさえ食おうとするのだと

ざわざわざわ

弟よ
なげくな
……
悟ることだ

私らは
すでに
母者の手の
届かぬ
大人に
なって
しまった…

弟よ この上は 悟ることだ
やがて 私らは 嫁を娶り 稚児を もうける だろう
その時こそ 母者のように 哀しい想いを させまいぞ…

人を 鬼心に させて しまうほど 淋しい 想いを かけまいぞ
わかった 兄者……

女(ひと)は
時として
鬼になり

今昔物語集　巻第二十七　猟師母、成鬼擬噉子語第廿二　完